

第五十一日目

師 範：アメリカ合衆国は、イギリス・フランスについて、ドイツとほぼ同じ時期に産業革命を迎えます。

フランスやスペインから領土を獲得して、太平洋岸まで広げました。

そして工業化が進むと、機械制工場は夜も機械を動かしたほうが効率がよいので、労働者は夜遅くまで働くことになりました。

そのためにランプの燃料油が求められました。それには鯨からとれる脂肪が使われました。

太平洋をわたって捕鯨船が出るようになりました。

その船の食料や飲料水などを補給する港が必要でした。

また、中国との貿易をねらう船も出るようになりました。

そのため合衆国は日本の港を利用し、補給できるようにしたいと考え、ペリーを送りこんで来たのです。

そのペリーが、東海岸から大西洋をわたり、インド洋をへて日本にたどり着いたのが、1853年でした。

1853年 ペリーが日本に來航する。

この年を覚えましょう。

コン太：お父さんは



「いやーござったペリーさん」

と覚えたそうです。ぼくはこうしました。

「人はいつ見る ペリーの黒船」

「浦賀沖 人はいつ見る ペリー黒船」

「ひと」は1、「は」は8、「いつ」は5、「み」は3として、読みました。

ペン太：ぼくは



「てんやわんや混みあう浦賀に黒船ペリー」

「わん」は1の英語読み、「や」は8、「こ」は5、「み」は3です。

「黒船の一夜明ければ混みあう浦賀」

「いちや」は18、「こみ」は53となります。あいだがあきます。もう一つできました。

「ひとはコミカルに描くペリーの顔」

「ひとは」は18,「コミ」は53ですね。

師 範：いくつかできましたね。それぞれ調子もよく、描いていることも意味があるものばかりです。ペン太君のは、浦賀に人だかりができているようすが、よく出ています。

またペリーの似顔絵が瓦版という刷りものになって人々に広められましたが、そこに描かれた顔は、恐怖感もあって、恐ろしいような顔のものが多くありましたよ。